
けいおん！ 音の軌跡

クロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 音の軌跡

【Nコード】

N8815Z

【作者名】

クロウ

【あらすじ】

俺たちが歩んだ道はかけがえのないもの。それは、他人から見ればちっぽけなものかもしれないけれど、俺たちにとっては素晴らしいものだったんだ。この物語には、そんな俺たちの軌跡が詰まっている。「ナツ君、何やってるの?」「(唯)「ナツ、どうしたんだ?」「(漣)「ナツ、カツコつけんな」「(律)「ナツくん、かつこいいよ」「(紬)「ナツ先輩、似合いません」「(梓)「夏陽……………」笑」「(優斗)「おいコラ優斗〜!……………」とまあ、こんな感じだけどよろしくな?」「ぷぷっ……………夏陽……………」ゆ〜う〜とお〜〜!!」「(

夏陽)

一話 出遣い(前書き)

拙い文章ですが、よろしくお願ひします。
それでは、どつどつ。

一話 出遣い

風に舞う花びらが頬を翳める。

今日は私立桜が丘高校の合格発表の日だ。

受かってると嬉しいな〜、と軽いノリで俺こと風宮夏陽は掲示板を見る。

「やあ、夏陽」

「ん？ああ、お前もここ受けたんだっけ」

俺に話しかけてきたのは、中学のころから一緒の高梨優斗だった。

「どうだった？」

掲示板を指さし、優斗は言う。

この様子じゃ、こいつは合格してたんだな。

「まだ見てない……お、発見。ま、当然といえば当然だな」

あの努力が無駄になるなんてことにならなかったただけ良かった。

「あははっ。二人で二日間寝ないで勉強したもんね。アレは辛かったなあ」

「笑い事じゃないけどな」

中学の頃の思い出に浸りながら、俺たちは歩きだした。

とはいえ、まだ卒業してないけどな。

『憂、合格してたよ〜!』

『やったね、お姉ちゃん!』

『律、やったぞ!』

『漣、あつたぞ、私の番号!』

『もしもし、お父さん?……うん、合格してたよ』

ふと、そんな声が俺の耳に聞こえた。

それが、俺を変えていく声だということは、この時はまだ知る由もなかった。

優斗と別れ一人で歩いていると、後ろから声をかけられた。

「受験票、落としたよ〜」

振り返ると、茶髪のショートボブの女子がそこにいた。

「ん、ありがとう」

「ねえ、君、受かった?」

見ず知らずの人間に聞いていいものなのか、と俺は思った。

「ああ、受かってたよ」

とりあえず質問に答える。

受かってて良かった……………

「そっか、私と同じだね！」

そっか、この子も桜高に合格したのか。

「あ、名前なんて言うの？」

「ああ、自己紹介まだだったっけ。俺は、風宮夏陽。

好きなものはファミレスのセットメニュー、得意なものはギター！。

まあ、同じクラスになったらよろしくな。んで、君は？」

「私は唯。平沢唯だよ。よろしくね、ナツくん」

「……………はい？な、ナツくん？」

初対面の女子に一発で渾名をつけられた。

……………しかも、ナツくん？

「うん。『夏陽』だからナツくん」

「あのさあ……………さすがにそれは……………」

抗議しようとした時、

「お姉ちゃん！」

ポニーテールの女子が、走ってきた。
言動から察するに、平沢の妹だろう。

「受験票、渡した？」

「うん」

「あ、申し遅れました、お姉ちゃんの妹の平沢憂です。よろしくお願ひします」

なんか、しつかりした子だなあ……

「俺は「こつちはね、ナツくんだよ！さっき、友達になったんだあ」……」

「な、ナツくん？」

「風宮夏陽。だからナツくんなんだと」

「へ、へえ……」

ま、呼び方はどうでもいつか。
正直、嫌じゃないし。

「夏陽さん、これから食事でもどうですか？合格祝いも兼ねて」

「おお〜！それいいね〜！」

「別に構わないけどなあ……良いのか？」「一緒しちゃって」

なんかこう、一緒に食事つても気まずい気がするんだよな。
平沢は気にしないとは思っけど。

「ぜんっぜん構わないよ！ね、憂！」

「はい。夏陽さんさえよければ」

「そっか。じゃ、行こうか！」

「レッシン」

こうして、三人で平沢の家へ。

……………そう、……………平沢の家へ。

「なあ、どっかで食っの？」

この辺は俺の家からも近いので、地理についてはよく知っている。
だから、どこで食事をとるのか気になった。
ファミレスやバイキングは逆方面だったはず。

「もちろん、私っちだよ」 憂のご飯はね、すっごく美味しいんだ
「よ」

..... 私たち？

何言ってるだろう。

平沢の家？女子の家？知り合ってる数十分の？

「あ、あのさ.....さすがに女子の家に入るのは.....」

「別に気にしなくても大丈夫ですよ？

夏陽さん悪い人じゃなさそうですし、

友達の家気分でも全然平気ですよ」

「ナツくんなら大丈夫だよ！だってナツくんだもん！」

平沢、お前の理由づけはおかしいと思うぞ。

「そこまで言うなら.....まあ、いいか」

多少の抵抗を感じながら歩く。

「ここだよ〜」

ふと気づけば、そこには俺の家と同じくらいの家。
どうやら平沢の家に着いたらしい。

「どっぞどっぞ〜」

「お、お邪魔します.....」

「あ、スリッパどうぞ」

(ホントによくできた子だなあ……)

平沢はこんな妹を持って幸せだなあ……

俺も兄弟欲しいなあ……ああ、妹がいいなあ……

「できるまでちょっと待っていてくださいね。お風呂でも入りますか？」

「いや、大丈夫だよ。それより、手伝おうか？」

「いえ、お招きしておいて手伝わせるのも……」

「ナツくん!!」

「うわっ!?!ひ、平沢!?!お、おい、離れろっ!?!」

平沢妹と話していたら平沢に抱きつかれた。
俺も健全な男子なので、恥ずかしいわけだ。

「やだ」

変な所でこの子は頑固だな……

「ねえ、ナツくん、上行こ?」

「上って……?」

「私の部屋だよ?」

この子には、性別という壁がないのか不思議に思った。

先ほど頑固なのを確認済みのため、素直に従う。

「どござ〜」

「し、失礼します……」

案外普通の部屋だった。

本棚に詰まった漫画、机に散らばるテキスト。
ベッドの上には脱ぎっぱなしのTシャツ。
ちよつとだらしない、かな。

「ちゃんと片付けた方がいいんじゃないか？」

「うっ……今度やっておきます……」

俺の指摘に顔を顰める平沢。

そんな仕種をする彼女に、少し心が揺れた。

俺たちは、中学生の頃の事、高校生になってからの事、お互いについて、面白おかしく話した。

やがて、そろそろ平沢妹が呼びに来るか、という所で、

「ねえ、ナツくんの初恋の人って誰？」

なんてことを聞いてきた。
こんな極限状態で恋の話を持ち出すなって…

「お、俺？そっいえば、好き、とか考えたことないな……ひ、平沢は、どうなんだ？」

律儀に答えて同じ質問をする。
すると、平沢は顔を赤くして答えた。

「へっ！？わ、私！？うーんと、私もあんまり考えたことなかったな〜」

じゃあ何で顔が赤いの、と聞こうとしたがやめた。
流石に今日初めて見知った女子にそこまで聞くつもりはない。
と、そこに、

「お姉ちゃん、夏陽さん、ご飯できましたよ〜」

料理が出来たという報告が。

「ホントに？ナツくん、行くー！」

「あ、ああ……ありがとな、平沢妹」

「いえいえ」

こうして、一緒に食事をとった。
はっきりに言って、めっちゃくちゃ美味しかった。

「今日は本当に世話になった。ありがとう」

じゃあね、と手を振って平沢家を後にする。

「バイバイ、ナツくん！」

平沢妹の料理の味も忘れられなさそうだが、この時の平沢の笑顔も忘れられそうにない。

「女子を意識するのって初めてかも……」

平沢が同じことを考えているなんて夢にも思わず、一人呟いた。

一話 出遭い(後書き)

進展早い? いえいえ、そんなことはありません。
ここからが遅いから。早熟ってやつです(笑)

二話 青春の始まり（前書き）

PSPがぶっこわれました。

いろいろありまして。はがな買い揃う前に本体かな……

真紅さん、感想ありがとうございます。

それでは、第二話、どうぞ。

二話 青春の始まり

「ふああ……………ねむ……………」

春休みが終わり、今日からいよいよ登校。

ちよつと面倒くさいけどまあ、仕方ないか。

買い置きのパンをバッグに詰めて食パンにイチゴジャムを塗る。

『今日の星座占い、一位はいて座のあなた！

ラッキーアイテムはピン留め！二位は……………』

お、一位か。ピンつけて運勢アップと行きますか。

テレビを消して洗面所へ向かう。

が、ピンを部屋に置きっぱにしてあったので、いたしかたなく自室へ。

「　　」

口笛を適当に吹きながらピンを手取る。

スタンドにかけてあるレキヤスターに目を向けて、また離す。

ふと、時計が目に入った。

そこには、俺を焦らせるのに十分すぎるほどの情報が刻まれていた。

.....
.....
「遅刻だあああああああつ!!!!!!!!」

髪も整えず、制服も着崩し、俺は家を飛び出した。

(ヤバい。初日から遅刻なんてそんなの拙いだろ……!!!)

ダッシュもダッシュ、全力ダッシュで道を急ぐ。
カーブを曲がると、誰かとぶつかりそうになった。

「ッッ!!す、すいません、大丈夫ですか!？」

過失はこちらにも十分といえるほどだったので、謝る。
やば、時間……!!
そこにいた人物を見て、ドキッとした。

「は、はい……って、ナツくん？」

「ん?ひ、平沢?ご、ごめんな。っと、急がないと拙いな……行く」

「ナツくん!」好きにしてくれ……………」

なんで二回も重ねて言う必要があったんだろう。
と言うより、俺の自己紹介の重要な部分が平沢に取られてる気がする。

「フフツ。面白いわね。私は真鍋和。よろしく、夏陽」

真鍋和、ね。

「あ、そうだ。ナツくん、アドレス交換しようよ。
春休みの間寂しかったんだよ?和ちゃんも一緒に、ね」

「別に構わないけど…………ほら。完了つと。…………つてか、クラス分け
見に行こうぜ」

手短に済ませてクラス分けを見るよう促す。
と、そこに、

「夏陽。おはよう…………つて、夏陽が女の子を連れてる?」

優斗登場。

盛大に勘違いしてるし。

「別にそんなんじゃないやねって…………ほら、自己紹介ぐらいしろって」

「はじめまして。夏陽の友達の高梨優斗です。よろしく。えつと
…………」

「平沢唯です。よろしくね、優斗君」

「真鍋和です。よろしく」

「平沢さんに、真鍋さん、ね。よろしく」

挨拶をすませ、今度こそクラス分けを見に。

「優斗、どうだった？」

「3組。夏陽は？」

「俺も。一年間よろしくな、優斗」

「またしても同じクラスか。」

「ホント、縁が絶えないなあ。」

「そこに、平沢達が来た。」

「ナツくんたち、何組だった？」

「俺たちは二人で3組だよ」

「ホントに！？私たちも3組なんだあゝ よろしくね、ナツくん！」
と言いながら抱きついてくる平沢を、俺は軽く避ける。
嬉しいのは分かるが、抱きつくのは、なあ……………」

「私の家に来た時は避けなかったのに……………」

あゝあ。とんでもないことを言ってくれちゃったなあ、平沢。
真鍋はともかく、優斗はそれを知らないのに。

「へゝえ、夏陽、女子の家でそんなことしたんだ？」

ほら、こういう反応する。

めんどくさいなあ……………」

「飯を一緒に、って誘われたただだよ……………文句ないよな……………」

「はいはい」

誤魔化しても無駄なので、正直に答えた。
とりあえず、同じクラスということ、一年間お世話になる教室へ
と四人で歩を進めた。

二話 青春の始まり（後書き）

正月中は更新辛いかもしれません。
受験勉強とかもあるけど時間見つけてやっていききたいと思います。
今後ともよろしく願います。

オリキャラ プロフィール(前書き)

オリキャラ二名の簡単なプロフィールです。

オリキャラ プロフィール

プロフィール

風宮 かざみや
夏陽 なつひ

身長 171 cm

体重 55 kg

好きなもの

ファミレスのセットメニュー)

ドリンクバーもあれば更に良し。)

嫌いなもの

暑いのと寒いのが、静電気

見た感じも中身も普通の高校生。

髪は、黒髪をちょっとはねさせた感じ。

成績も悪くなく、別段抜き出ているわけでもない。

現在一人暮らしなので、家事も憂の邪魔にならない

くらいできる。

小学校の時父親に貰ったギターをきっかけに、音楽の世界へ。

高梨 たかなし
優斗 ゆうと

身長 173 cm

体重 54 kg

好きなもの

本(ジャンルは問わず、字が多

ければ良し)

嫌いなもの リア充（他人がイチャついでる
のを見ると腹立つ）

黒髪を下ろした、夏陽の友達。

成績優秀なのに予習・復習はそっちのけで夏陽に付
き合っていたため、

受験直前に辛い思いをしたが、本人は辛い、と本気
では感じていない。

意外と女子に興味津々。

オリキャラ プロフィール(後書き)

次話をお楽しみに！

三話 よく似た二人（前書き）

今回は夏陽と唯の距離が一気に近くなります。

でもまた離れてそのままちよっと経って……って感じで書いていきます。

それでは、どうぞ。

三話 よく似た二人

「生徒の皆さん……………」

校長先生の式辞が子守歌のように聞こえる。

今、俺は入学式のため講堂に来ている。

「今年から共学になった……………」

一言一言が俺を夢の世界へ連れて行くこととする。
そつえば、今年から共学だったわけ……………」

「……………zzz……………うん……………もう食べられないよ……………」

俺の寝言じゃない。

もう誰か寝ちゃったのか。

声は、俺のすぐ隣……………平沢の席からのものだった。

平沢じゃあ……………仕方ないか。

「ふああ……………ダメだ……………俺も……………限界……………」

思考も停止し、瞼も閉じられていく。

俺には、抵抗という術はなかった。

『全員起立』

その一言で目を覚ました。

ああ……寝ちゃったのか。

号令に従い、立とうとすると、何かが左袖を引っ張った。

「うん……？なんだ……？って、平沢？」

平沢が俺の袖を引っ張っていた。

「ナツくん……ダメ……だよ……」

何が！？何がダメなんだ、平沢！？

俺、お前の夢で何やってんの！？

……失礼、取り乱したな。

変な想像はやめて、平沢を起こす。

「……おい、平沢、起きろ」

すると、平沢は、ぱっと跳び起きた。

「あれ……？夢……？……ナツくん？」

「始業式、終わったぞ」

「もう終わっちゃったのか？……早いなあ……」

まあ、その意見に関しては同感だな。

「ほら、行こう」

「待ってよ、ナツくん」

クラスメイトと共に講堂を後にする。

………なんか、嫌な予感………

俺は歩きながらそんなことを考えていた。

「風宮君、平沢さん」

嫌な予感的中。

担任の先生にいきなり名指しで呼ばれた。

……しかも平沢と一緒に。

「……………はい」

「はい！なんででしょう!？」

なんでこの状況でそんなハイテンションなの、
と聞きたかったけど、今はそんな気分じゃない。

「式の最中に寝てはいけませんよ？」

「まったく、夏陽は……………」

「唯も変わらないわね……………あの二人、似てるわね」

優斗と和が喋っているのが後ろから聞こえる。

「すみませんでした」

俺は深々と頭を下げる。

優斗め……………絶対笑ってるな……………？

「は、はいっ！すみませんっ!」

隣の席では平沢も頭を下げて……………

ゴソッ!……………!

机に頭をぶつけていた。

「だ、大丈夫ですか？平沢さん」

「だ、大丈夫ですっ！」

ホントに大丈夫かな……？
たしか生徒手帳の中に……

「ほら、平沢」

「へ？ナツくん？これ…絆創膏？」

「ああ。傷に貼つといた方がいいんじゃないか？」

すると、平沢は眩しすぎるほどの笑顔で、言った。

「ありがとう、ナツくん」

たったこれだけ。

たった八文字に、平沢の気持ちが籠っていたんだと思う。
人に感謝されるのも、悪くない、かな。

「夏陽、顔真つ赤だよ？」

「はあ！？な、何言ってるんだよ、優斗！……」

やば、気が付かなかった。
考えれば考えるほど顔はさらに熱くなる。

『見せてくれるねえ〜』

『風宮君、ファイトだよ〜』

他のクラスメイトも参加してきて、もうお手上げ。
俺は一言残して廊下に出る。

「俺はそんなつもりないし、平沢だって迷惑そうだぞ！」

なんかなあ〜、と水道で顔を洗いながら考える。

（いったい何なんだかなあ……ま、ぐだぐだ考えても仕方ないか）

俺は、初めて平沢と会った日の帰りに呟いたことを思い出せなかった。

唯 side

何だろう。

私、どうしたんだろう。

さつき、絆創膏もらった時、嬉しい、って思った。

これって、恋、なのかな？

でも、ナツくんそんなつもりはないって言ってたし……

誰か好きな人がいるのかなあ……

「唯、大丈夫？」

そんな私を、和ちゃんが心配してくれた。

「うん、大丈夫だよ」

優斗君も、私を励ましてくれた。

私の心を見透かしたような目で。

「大丈夫。夏陽は嘘が下手だなあ」

そう言った。

でも、難しいことは分かんないや。

とりあえず、恋とかそういうのは後回しだね。

もん。.....だって、なんかよく分かんないんだ

唯 side
了

三話　よく似た二人（後書き）

唯の言葉通り、恋は一時休戦です。
次回から軽音部がようやく登場！
お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8815z/>

けいおん！ 音の軌跡

2011年12月29日02時53分発行